

平成17年度 第1回海岸工学論文編集小委員会 議事録

日時： 2005年8月19日(10:00～18:00)

場所： 土木学会本館2階 講堂

出席者： 間瀬(小委員長)、横木(副小委員長)(代理：信岡)、
加藤、黒岩、後藤、北野、小林、斎藤、佐々木、佐藤、重松(代理：森)、関本、武若、
富田、中川、中山、長谷部、松山、八木、川崎。 敬称略

議事

1. 海岸工学論文集第52巻の編集、校閲

委員会構成の手順と注意事項(配布資料)にしたがい、291編についての委員会校正を行った。

2. 海岸工学論文集の査読体制・方法および出版形態に関する検討

- (1) 間瀬小委員長から、配布資料にもとづき、論文集の質の向上と2次査読の厳密化に関して、オフセット印刷を含めた出版日程の見直しに関する提案があった。
- (2) 佐藤委員(幹事長)から、配布資料およびパワーポイントにより、はじめに、現在の査読小委員会、論文編集小委員会に関する組織構成、役割分担、さらに、査読方法およびそのプロセスに関する説明があった。続いて、①今後の査読体制、②査読方法、③出版形態に関する提案があり、フリーディスカッションの後に、以下の方針を確認した。

①今後の査読体制

【方針】

- 1) 現在の査読小委員会を廃止し、査読から編集までを編集小委員会が担う。その際、現在の編集小委員に、幹事を編集小委員会兼務として加え、編集小委員会を強化する。

=フリーディスカッション=

- ・1次査読および2次査読ともに、幹事を含めた約40名で行うのは大変ではないか。
- ・1次査読に関しては、現状の約70名を目標に、査読の依頼をする。
- ・合理化は非常に重要である。しかし、論文集の体裁を整えるためには、今回のような編集会議は必要である。編集会議によって蓄積されること、新たに再確認できることがたくさんある。出版費を抑えることによって満たされない体裁などの部分は、会議費を計上し、編集でカバーする必要がある。

②査読方法

【方針】

- 1) 従来どおり、2段階の査読を行う。ただし、2次査読を厳密化し、2次審査による掲載不可の可能性を検討する。
- 2) 1次査読および2次査読ともに、電子投稿を導入する。
- 3) 主査・副査(2名)制を導入し、主査は幹事が、副査は幹事以外の編集小委員が担当する。

=フリーディスカッション=

○2 段階査読の可否について

- ・現状の1次査読の方法では、査読者の立場から見ても判定が難しい。
- ・幅広く内容を審査するため、他分野の内容を審査することも必要である。
- ・2次審査を厳密に行うのであれば、1次査読は不要ではないか。
- ・リスク回避のためにも、2段階査読は必要である。
- ・年度末である3月末に、フルペーパーを準備するだけの時間が確保できない。
- ・さまざまな分野からの投稿を受け入れるためにも、1次査読は有効。
- ・水工学論文集の例を参考にしてみてはどうか。

○1 次審査について

- ・1次査読の際、他分野の内容を査読するのは困難である。専門分野だけで査読できないか。
- ・幹事を含めた編集小委員会約40に加えて、査読者を他に委任できないか。

○2 次審査の厳密化について

- ・2次審査の厳密化することとは、講演会場の確保に支障をきたさないか。
- ・1次査読である程度の不採択、2次審査でもある程度の不採択をだし、現状の講演件数が確保できないか。
- ・2次審査で不採択件数が増加しても、討議時間を増やすなどして、確保した会場の有効利用はできる。3日目午後に、参加者が激減することへの対策にもなるのではないか。
- ・落とすことが主ではなく、質を向上することが大切である。
- ・しっかりとした査読規定が必要である。

○2 次審査の主査・副査制および査読規定について

- ・論文集の価値を高めるためには、査読規定を明確にする必要がある。その中でも、査読員が奇数（3名）であることは重要である。

③出版形態について

【方針】

- 1)今年度の出版形態を継続しながら、将来的な電子ジャーナル化への対応準備を進める。

=フリーディスカッション=

- ・土木学会論文集も電子ジャーナル化へ移行している。海岸工学論文集の電子ジャーナル化へ移行は時間の問題である。
- ・出版経費の削減を考えると、今年度の体裁の質は十分である。
- ・著者構成のみで、今回のような2稿は不要である。
- ・より高い体裁の質を保持するために、今回のような校正が必要である。
- ・電子ジャーナル化までの間、Webなどで公開してはどうか。
- ・論文集の発行に変えて、CD-ROM+アブストラクト集ではどうか。
- ・CD-ROMはほとんど読まない。
- ・紙による発行をなくした場合、講演会の開催を含めて経費は確保できるか
- ・紙による発行をなくしても出版費が抑えられることに加えて、掲載料などで経費は確保できる。
- ・電子ジャーナルへ移行するまでに、出版形態を統一しておいたほうがよいのではないか。
- ・今年度分に関してもPDFファイルで保存しておくことができないか。

- ・紙による論文集の発行およびその体裁の維持は、若手研究者の人事評価に重要ではないか。
- ・人事評価の際には、論文の査読規定が重要となるのではないか。

査読体制についての意見分布

査読小委員会を廃止して編集小委員会を強化する、が大多数意見
(査読委員の人数、匿名性を検討する)

査読方法についての意見分布

一次審査は従来通り，二次審査を厳密化：	14名
一次審査を緩く（2割程度不採択），二次審査を厳しく（2割程度不採択）：	4名
一次審査をなくし，二次審査のみ：	2名

出版形態についての意見分布

オフセット印刷よいと思う	13名
--------------	-----

今年度形式を継続し，ある時点で電子ジャーナルに移行が多数意見

3. 電子査読WGについて

- (1) 電子査読システム構築にむけて，以下の4名により電子査読WGを立ち上げることに
なった。
佐藤，後藤，武若，森

4. 出版形態WG

- (1) これまでの経緯を踏まえて出版形態を検討するため，以下の5名により出版形態WG
を立ち上げることになった。
間瀬，小林，佐々木，重松，八木

5. 表彰について

- (1) 査読の厳密化と対に，論文賞あるいは，奨励賞など，表彰に関する議論が行われた。
賛成が多数であった。

以 上 （文責：齋藤，間瀬）